

# 市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.115  
2009/8/1



発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL:03-3423-0185 FAX:03-3402-3218  
郵便振替：00120-9-359506 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp ホームページ：http://www.1jca.apc.org/iken30  
\* 隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円 グリーン会員の方は年1000円



尾田 龍馬 「宇和島の風景 (上)」  
「自画像 (左)」(無言館所蔵 作者の経歴は3ページ)



尾田家は芸術一家だった。みんなが絵や音楽を愛した。龍馬もヴァイオリンを弾いた。そんな龍馬に画家になることをすすめたのは姉の登美子だった。戦地に発つてからも、登美子は龍馬に励ましの便りを書き、絵の具を送った。登美子が早く結婚したのも、少しでも龍馬に絵の具を買ってやりたかったからだ。死期が近づいた関東州の病院で、龍馬は最後の力をふりしぼって思ある姉のために芍薬の絵をハンカチに描いた。遺骨とともに戦地から送られてきたそのハンカチを握りしめ、登美子はただ号泣した。

(窪島誠一郎『無言館を訪ねて 戦没画学生「祈りの絵」第II集』講談社刊より)

## 市民の意見 115号 目次

● 帝国の危機の中での「チェンジ」と「政権交代」  
どんな争点をだれがつくるか  
武藤一羊 4

● 特集 若い世代と近現代史教育

歴史を伝える意味——近現代史は

いかに教えられているか？  
八柏龍紀 8

私たちの世代の歴史感覚  
周 婷婷 11

● 再び踏みこじられた表現の自由

沖縄アトミックサンシャイン展  
天皇題材作品の展示拒否に抗議する  
小倉利丸 14

● 無言館ツアーに参加して

表紙絵作者のご遺族に出会えた！  
参加者のアンケートから  
阿部めぐみ 30 28

● 運動の現場から

上関原発建設を阻止するために  
意見広告運動第9期スタート  
山戸貞夫 22  
佐藤光子 24

● 文化

巻頭詩 鼻のある結論  
〈原爆〉を伝えることの難しさ  
山之口 2  
林 次樹 20  
鈴木一誌 26  
本野義雄 27

自由の行方 連載エッセイ⑫  
映画の紹介 『妻の貌』  
まっただたえこ 34

『ふしぎの国のありか』⑳

● その他

読者のおたより 32  
インフォメーション  
事務局だより 35  
会計報告/編集後記 36

◆ カット 吉岡セイ  
◆ 題字 安西賢誠

☆ 8月の読者懇談会のご案内 ☆

・テーマ「流動する世界、市民の選択」武藤一羊さん(ピープルス・プラン研究所、本号P4論文参照)  
日時：2009年8月14日(金)午後6時半 参加費500円/ピープルス・プラン研究所(文京区関口1-44-3信正堂ビル2F) 地下鉄有楽町線江戸川橋駅1-b出口3分 P13地図参照 電話：03-6424-5748)

# 鼻のある結論

山之口 獏

ある日

悶々としてゐる鼻の姿を見た

鼻はその両端をおしひろげてはおしたゝんだりして 往復してゐる呼吸を苦しんでゐた

呼吸は熱をおび

はなかべを傷めて往復した

鼻はつひにいきり立ち

身振り口振りもはげしくなつて くんくんと風邪を打ち鳴らした

僕は詩を休み

なんどもなんども洩をかみ

鼻の様子をうかゞひ暮らしてゐるうちに 夜が明けた

あゝ

呼吸するための鼻であるとは言へ

風邪ひくたんびにぐるりの文明を掻き乱し

そこに神の気配を蹴立てゝ

鼻は血みどろに

顔のまんなかにかんばつてゐた

注1 神風号 1937年、新聞社間で長距離飛行記録競争が盛んになる中、朝日新聞社が飛ばした同機が東京～ロンドン間を94時間17分56秒で飛び、熱狂的な反響を呼んだ。

注2 アンドレ・ジイド(1869～1951) フランスの作家。30年代、ファシズムの圧力に抗する人民戦線政府を支持していたが、ソヴィエト旅行後ソ連の社会主義体制を批判する本を書き、大きな反響を呼んだ。代表作「贖金づくり」「狭き門」など。

またある日

僕は文明をかなしんだ

詩人がどんなに詩人でも 未だに食はねば生きられないほどの

それは非文化的な文明だった

だから僕なんかでも 詩人であるばかりではなくて汲取屋をも兼ねてゐた

僕は来る日も糞を浴び

去く日も糞を浴びてゐた

詩は糞の日々をながめ 立ちのぼる陽炎のやうに汗ばんだ

あゝ

かゝる不潔な生活にも 僕と称する人間がばたついて生きてゐるやうに

ソヴィエット・ロシヤにも

ナチス・ドイツにも

また戦車や神風号(注1)やアンドレ・ジイド(注2)に至るまで

文明のどこにも人間はばたついてゐて

くさいと言ふには既に遅かつた

鼻はもつともらしい物腰をして

生理の伝統をかむり

再び顔のまんなか立ち上つてゐた

▼ 表紙絵の作者 ▲



尾田 龍馬

(おだ・りょうま)

▼ 詩の作者 ▲

山之口 獺 (やまのぐち・ばく、1903～1963)

沖縄・那覇の銀行員の家庭の、7人兄弟姉妹の3男に生まれ、中学生の頃から詩作を始める。1925(大正14)年二度目の上京、書籍発送、暖房器具販売、鍼灸師、ダルマ船助手、汲取り屋、ニキビ・ソバカス薬の通信販売などさまざまな職につきながら詩を書き続け、佐藤春夫、金子光晴らの知己を得る。「鼻のある結論」は1937年、雑誌「改造」に掲載された。

1919(大正8)年8月29日、愛媛県宇和島市に生まれる。県立宇和島中学校卒業後、1939(昭和14)年4月、東京美術学校油絵科に入学。姉・登美子の援助をうけて学び、1943(昭和18)年9月繰り上げ卒業。同年11月1日、入営。航空第21連隊関東州柳樹屯満州第789部隊に所属。1944(昭和19)年11月10日、関東州柳樹屯にて戦病死。享年25歳。

# 帝国の危機の中での 「チェンジ」と「政権交代」

——どんな争点をだれがつくるかが勝負をきめる

武藤 一羊



だろう。その隙間にテコを差し入れ、政策変更への圧力を——例えば沖縄の基地について——強めるべき状況が生まれているのである。

## ■オバマの任務は巨人機の不時着

バラク・オバマが「チェンジ」を訴え、米国の建国の精神を呼び覚ます魅力的な弁舌の力で、何百万の草の根のアメリカ人の心を揺り動かし、大方の予想を裏切って当選し、アメリカ大統領に就任してから半年余が過ぎた。オバマ政権が何であるのか、この政権の率いるアメリカはどこへ行くか、こうとしているのかについて分析するのは、この文章の目的ではない。だが、投票直前、フランシス・フクヤマが「オバマの方が（マケインより）帝国の没落をうまく管理できる」としてオバマ支持に踏み切ったことが強い印象に残っている。フランシス・フクヤマは、ソ連の崩壊でリベラル・デモクラシーが最終的に勝利し、それによって「歴史は終焉」したと論じた右派の論客だが、彼のこの言葉はオバマ政権の性格を言い当てていた。アメリカ帝国という巨人機はブッシュ機長による能力を超える機首の上げすぎで失速し墜落寸前の状態に陥って

いた。この巨人機を失速から救い、どこかに不時着させるのが、すなわち帝国支配を崩壊から救い出すのが、パイロット席に到達したオバマの任務なのである。

だから私は、オバマ大統領とその政権には少しも幻想を持っていない。だが彼の「チェンジ」の約束が若者を含む大きな草の根のうねりを作り出し、それによって当選を勝ち取ったことはやはり大きい意味を持ち続けていると思う。ヒラリー・クリントンが候補者になっていけば、民主党の伝統的な選挙マシーンに能率的に動いただろう。だがオバマの場合のような予想外の横への自発的な動きは起こらなかっただろう。そのような事情から、またアメリカにとつての危機の深さのせいでも、オバマ大統領は戦後の歴代大統領の誰よりも下からの進歩的世論の圧力に影響されやすい大統領になったと言えるだろう。逆に言えばアメリカ国内と国際的な民衆の連携によってアメリカ政府の政策を多少でも変更させる手掛かりとなる隙間が生じていると見るべき

導力を回復しよう——つまり拳国一致でアメリカ帝国を救おう、という「ユニティ」の訴えとセットになっていて、逆にアメリカ国民の帝国意識を煽る力を持っていた。とはいえ、オバマ政権は、ブッシュ政権と明確な一線を画することで誕生したのである。先制攻撃の正当化とイラク戦争は否定され、世界的孤立を招いた一方的行動主義は放棄され、国際協調と「敵とも対話する」路線に転換する。グアンタナモの収容所の閉鎖が約束された。大金持ちを超・超大金持ちにすることが国益を増進するという式の経済・財政政策は否定された。オバマ政権は「テロとの戦争」という用語を静かに引っ込め、過激主義者との闘いという言葉に差し替えた。「テロとの戦争」が続けられる限り、アメリカは戦時国家、大統領は戦時大統領だからである。だがその一方、「テロとの戦争」の終結も宣言されず、アフガニスタンでは米軍の大量増派による軍事解決が追求されている。オバマにとつてこれは致命的な選択になる確率が高い。アメリカ



帝国「中興の祖」を期待されているオバマが、立て直しに成功するかどうかが行き先はひどく不透明である。

## ■「チェンジ」と似て非なる政権交代

さて日本である。オバマ政権の誕生は、ブッシュ共和党政権にしがみついていた日本政府にとって、屋根に登って梯子を外されたにも等しい出来事だった。だが米国内の変化を待つまでもなく、ブッシュの没落とオバマの台頭を招いた同じ状況変化は、

自民党の支配体制の根本をぐらぐらに揺すぶっていたのである。危機状況への応答がアメリカではオバマの「チェンジ」だったとすれば、日本でのその対応物は「政権交代」という叫びである。50年を越す自民党支配を終わらせ、民主党を中心とした政権をつくるという話である。だがマスコミを賑わし、当事者によっても高唱されている「政権交代」は、どうもオバマの「チェンジ」とは似て非なるものではないかと思われるのである。なぜならこの「政権交代」が日本政治の何から何への交代を意味するかが一向にはつきりせず、衆議院選挙を目前に、いわゆる「政局」についてどうでもい話題が洪水のように提供されながら、当事者からさえ明確な争点が提起されていないからだ。最近のBS放送の番組で、民主党の岡田幹事長が、来るべき選挙の最大の争点は何かときかれて、「政権交代そのものが

最大の争点だ」と真顔で答えていた。

これはいったい何であろうか。催眠術に長けていた小泉が去ってみると、有権者の信任を受けずに次々に首相の座についた安倍、福田、麻生は、ことごとく民衆の信頼を失い、自公政権が破たんしたことは誰の目にも明らかになった。その破たんした自公政権とは何だったのか、その何が批判され、断罪されるべきなのか。

野党が「政権交代」の必要を説くとするなら、まずこの自公政権がどのような基本政策や行為で国を誤らせたのか、責任ある判断を明らかにすることが必要だ。そしてそうした政策や行為に終止符を打ち、その代わりに自分たちの政策を打ち出すのが当然だろう。だがそのような議論は、「政局」議論のから騒ぎの中で少しも聞こえてこない。いや聞こえてこないのではなく、もともと政治世界では行われていないのではないだろうか。7月7日現在、選挙の日取りについての大騒ぎにもかかわらず、選挙公約であるはずの「マニフェスト」は、自民党からも民主党からもまだ出ていない。公約は原則的問題ではなく、人気取りと党内調整の産物という位置づけしかないかのようなのだ。

## ■自公政権が犯した三つの誤り

政権交代を目指す野党勢力は、最低限ブッシュ政権期に、自公政権が犯した明白な誤りから手を切らなければならない。そ

れらは、部分的な失政や誤りではなく、日本列島社会の在り方にかかわることがらだからである。以下のような誤りである。

- (一)〈日米同盟〉ブッシュ政権の「反テロ」戦争、とくにイラク侵略戦争への無条件支持と、「日米同盟—未来のための変革と再編」の取り決めのもとに、沖縄を国内植民地として扱いつつ、日本の米軍指揮下への完全統合を推進し、憲法を無視して、インド洋、イラクに派兵したこと。
- (二)〈右翼の支配〉日本帝国を美化する極右勢力が政権を支配し、この流れが社会的に主流化することを陰に陽に支えてきたこと。その下で歴史の捻じ曲げ、アジアとの関係の悪化、とくに北朝鮮と在日朝鮮人への排外主義的扇動、女性の権利へのバックラッシュ、教育の国家支配、海外派兵の日常化による軍事力のその総仕上げとしての強引な明文改憲へのドラマイブが進められてきたのである。
- (三)〈小泉「改革」〉資本の利益と競争を至上命題にするネオリベラル「改革」とグローバル化によって「公共」を解体して私営化（民営化）し、労働者の権利を否定する財界提案の労働法制を垂れ流し的に政策化し、格差の拡大と地域の空洞化と社会の荒廃を招き、弱者を切り捨て、労働を使い捨てることを当然視する風潮を定着させたこと。

オバマの「チェンジ」に見合う変化が日本に起るとすれば、それは最低限、右の三項目について自公政権の既成事実を取り消し、責任を問ひ、別の路線で置き換えなければなるまい。それは次のような方向をもつ路線であろう。(一) 小泉政権以来なされた対米軍事取り決めの再検討に向けて再交渉を開始し、(二) 日本帝国の戦争と侵略を正当化する言説への国家の加担を一切やめ、戦後補償の要求にこたえ、改憲を行わないことを宣言しつつ、憲法の前文および九条の実現に向けて積極的にとりくみ、

(三) 格差を減らし、地方と農業を復興させ、労働の権利を再確立し、すべての住民の平和的生存権を保障し、下から大資本を規制する体系的プログラムを実施する。

これらは日本社会を革命的に変えるような大層な提案ではない。むしろ米国におけるブッシュからオバマへの変化、すなわちかの「チェンジ」の幅に相当するくらいの微温的といえる提案である。つまり普通に考えれば、二大政党間の「政権交代」でこなすことを期待できるはずの変化である。例えばブッシュの戦争が誤りであったことがアメリカ政府によって認められているとき、その戦争を支持したことも誤りであったと認め、それが正しいとして行われた行動、政策、立法もまた誤りであったとすることは、当たり前ではないか。

## ■真の問題を回避する民主党

民主党が当たり前のことを認められないのは仕方ない。自分でやったことだからである。しかしその民主党にとって代わろうとする民主党は、上記の3項目について、オバマのブッシュ批判の程度でも、立場や原則を明確にしているか。ことごとくあいまいである。自民党との違いを見せるために対米軍事協力についてながしかのことは口にする。だが普天間基地の無条件閉鎖や辺野古新基地建設の撤回や地位協定の改定やについて米国との交渉を本気で行なうつもりかどうか、それは未知数である。肝心の改憲については、党首の鳩山由紀夫は『新憲法試案』という著書まである明確な改憲論者で、自衛軍や集団安全保障を憲法に書き込めと提案している人物である。今年の3月、鳩山氏はメールマガジンで「早く政権交代を実現させ、憲法の論議も可能になるような安定政局をつくりださなければなりません」と述べていたと、『しんぶん赤旗』は報じていた(3・13)。民主党はその成り立ちからして、旧社会党の護憲論者から、核武装の提唱者、軍産複合体の代弁者、「靖国派」右翼までを含むたいへん幅広い政党であることはよく知られている。民主党に担ぎ出されて静岡県知事に当選した川勝平太ははっきりした右翼知識人の一人である。川勝は「安倍内閣では教育再生

会議の分科会主査や『美しい国づくり』企画会議の委員などを務め、有識者メンバーとして国政にかかわった。〈新しい歴史教科書をつくる会〉の賛同者にも名を連ねている」という(産経ニュース、7月5日)。

民主党とはこういう党であるから、真の問題を回避するしかない。そこで、「政権交代」そのものが最大の争点ということになるのだ。そして、本当の争点の代わりに登場させられたのが「官僚政治の打破」、「霞が関打倒」、「地方分権」などというスローガンなのである。自民党の地盤沈下に悪乗りして、「地方分権」を旗印に、自分を総裁候補にしてくれれば自民党から立候補してあげよう、などと言いだすピエロのような人物も現れ、ピエロでもお客が入りさえすればいいか、とそれに乗るそぶりを見せる選対責任者も出てきて、その掛け合い漫才風のやりとりをマスコミが面白く伝える。ここで言われている「地方分権」は、中央政府と県知事の予算と権限の配分をめぐる権力闘争で、住民自治や民主主義の活発化とはまったく関係ない話なのだ。

真の争点はこうして騒音で耳から遮断され、迷彩で目から隠され、そのうえでニセの争点、あるいはたかだか真の争点の尻尾か切れっぱしが有権者の群れに投げ与えられる。そういう風に事態は進行している。